

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04340

研究課題名(和文) 爪切りケアをめぐる乳幼児期と高齢期の自他関係に関する縦断・横断的研究

研究課題名(英文) A longitudinal and cross-sectional study of self and others relationships in infancy and older regarding nail trim care

研究代表者

松本 光太郎 (Matsumoto, Kotaro)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60420361

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：乳幼児の爪切りの縦断研究を中心に、養育者が子どもの爪を切る動機として、乳児自身が自分の身体を傷つけてしまうことにくわえて、養育者自身が傷つけられてしまう親子の事情が絡み合っていること、また手という対象関係は手を握られ動かそうとすることにより生じることなどから他者が関わっている可能性、そして痛みの形成において「イタイ」という言語使用における言語と感覚との関係、それから爪切りを生後10か月ごろ嫌がるようになり、2歳前後であらためて爪切りを拒否するようになり、この後拒否は徐々に収束していく過程の心理発達について提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

爪切りという日常行為にはらむ親子のあいだで生じる困難や、身体内の対象関係の成り立ちにおいて他者が関わる可能性、それから痛みの形成や心理発達を爪切りの拒否の収束から読み解いていくことなど依然粗削りながら乳幼児研究や自他関係の研究に新たな知見を提供しうる成果である。また学術的意義にとどまらず、子育てを行う養育者において表立って問題にされたなかった爪切りという難題や、広く子どもをケアすることの悩ましさを知らしめる社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：Focusing on a longitudinal study of infant nail trimming, we found that the motivation for caregivers to trim their children's nails is not only that the infants themselves hurt themselves, but also that the parent-child situation in which the caregivers themselves are hurt is intertwined, and that the object relationship of the hand is created when the hand is held and the child tries to move it, which suggests the possibility that other people may be involved. The relationship between language and sensation in the use of the word "hurt" in the formation of pain, and the psychological development of the process of convergence after the child begins to dislike nail trimming at around 10 months of age and who again began to refuse it at around 2 years of age, and the refusal gradually subsided after that. The psychological development of these processes is presented.

研究分野：心理学

キーワード：爪切り 手 乳幼児 高齢者 親子 自他関係 ケア 痛み

1. 研究開始当初の背景

(1) 身体ケアと虐待

2007年に福岡県北九州市の病院に勤務する看護師が認知症高齢者の爪を切ったことで虐待が疑われ、傷害罪で逮捕される事件があった。高齢者が自分で爪を切れない場合、伸びている危険な爪を誰かが切らなければならない。誰かに爪を切ってもらう必要は乳幼児においても同様である。爪切りは身体ケアを意図しているが、意味が反転して虐待と受け止められかねない悩ましい生活行為である。

(2) 自他のつながらなさ痛み

爪切りは爪を切られる者と切る者という別の身体同士で行う営みである。また、爪切りでは切られる者と切る者が、切られる者の身体の一部である手の爪を対象にした「共同注意」を形づくっている。相互に信頼していても深爪になったときには、切られる者と切る者の痛みをめぐる経験の違いが生じる。切られる者は深爪をされると痛みを感じ、切る者は反応や身体の緊張からいくらか感知しながらも痛みを直接感じない。痛みの私秘性と公共性は哲学における中心的課題として、さらに発達心理学の一部において研究がなされてきた。爪切りは痛みをめぐる自他のつながらなさが顕わになる生活行為である。

(3) 自分の爪を切る手と身体

自分で自分の爪を切る際には、片方の手に爪切り道具を持って操作し、もう片方の手の爪を対象にする。すなわち手は自分の身体の一部でありながら、かつ対象でもあるといういわば身体内で自他関係が成り立っていることが爪切りの要件になる。手をめぐる身体内の自他関係が、確固として成り立っていないのが乳幼児期であり、成り立っていたはずが崩れつつあるのが高齢期であると考えられる。爪切りを出来ることが身体内の自他関係の成立の指標になりうる。

2. 研究の目的

(1) 自他関係の成り立ち

爪切りケアを構成する爪を切られる者と切る者における自他関係の成り立ちを明らかにする。特に発達過程の異なる乳幼児と高齢者における爪切りケアをめぐる自他関係の違いを検討する。また、爪切りに潜む身体ケアの困難さの成り立ちを明らかにすることも課題である。

(2) 身体内の自他関係における形成過程と崩壊過程

自分で爪を切ることが出来るようになるプロセスとその意味を解明するために、身体内の自他関係における乳児期の形成過程と高齢期の崩壊過程をたどることを課題とする。この研究を通して、四肢から手や腕に進化した人間の特徴を明らかにすることや爪切りを単位とした生涯発達の構想にも取り組む。

3. 研究の方法

(1) インターネットをはじめとする道具を媒介した間接観察

爪切りに直接立ち会うのは、通常爪を切られる者と切る者に限られ、外部者が立ち会うことは難しい。そこで、乳幼児の爪切りに注目する縦断研究では、乳幼児の爪切りに必ず立ち会う者、すなわち乳幼児の爪を切る養育者に爪切りにまつわる質問をメールで定期的を送り、乳幼児の爪を切るときの様子や養育者自身の経験などをメールやSNSを媒介して教えてもらう間接観察もしくはインタビューを行う。高齢者の爪切りに注目する縦断研究では、自宅もしくは施設を定期的に訪問し、爪を切るときの高齢者の様子や本人の経験、爪を切る家族や介護者の様子や経験を質問に答えるかたちで教えてもらう。

(2) 訪問による直接観察

乳幼児期の縦断調査では、インターネットを媒介した間接観察にくわえて、半年～1年に一度直接家庭を訪問することも行う。乳幼児の変化にくわえて、生活環境の変化を直接観察するとともに、養育者には近況を聞き、乳幼児と直接関わることが目的である。

4. 研究成果

本研究では、4名の0歳児の縦断調査から始めた。コロナ禍の影響により研究期間を延長したことで予定していた期間よりも長く調査を行い、充実した調査結果を得た。現在6～7歳になった子どもたちの間接観察は継続していて、「研究の目的(2)」の身体内の自他関係の形成過程の到達点である爪切りが自分で出来るまで続ける予定である。一方で、高齢者の縦断調査はコロナ禍の影響により特別養護老人ホームをはじめとする高齢者施設に感染予防のため入ることが出来なくなり、公民館等も調査の協力を得ることが難しかった。そのため、縦断調査は行えず、横断調査にとどまった。よって、現時点での研究成果は乳幼児期が中心となる。

(1) 養育者が子どもの爪を切る動機

実際の爪切りを間接的に観察することで明らかとなったことの一つに養育者が子どもの爪を切る動機がある。新生児期に子どもは自分の手の先の爪で自分の顔を傷つけ、しばらくすると自分の足を自分の手の爪で傷つける。この行為は寝返りやリーチングを始める頃には見られなくなるため、「ジェネラルムーブメント」(多賀、2002)と呼ばれる自発的で特定のパターンに特徴づけることのできない動きと考えられる。また、自分の身体を傷つけるのみならず、新生児の手の爪は抱っこや授乳を行う養育者の身体も傷つける。養育者は、子どもが自分の手で自分の身体を傷つけてしまうこと、そして抱っこや授乳といった子どものケアをするために接近することで自分の身体が傷つけられることが子どもの爪を切る動機になっていた。この爪を切る動機における養育者と子どもの絡み合った関係を読み解くことは今後の課題である。

(2) 対象関係の複層性

爪切りには、自分の爪を自分で切ることと他人が切ることの二通りがある。観察している子どもたちは爪を自分で切ることがまだできないため、他人が爪を切ることのみ検討している。新生児・乳児において手は対象になっているのか、どのような対象なのか。観察している子どもたちは爪を切られる際に手を握られると動かそうとする。そのなかで2名の子どもは10か月ごろに養育者の爪切りを嫌がるようになった。こどもは自分の手を対象として見ていたが、養育者と同じ対象を共有していなかったと考えられた。「共同注意」が成立するのは9か月ごろとされており(トマセロ、1999) 養育者と徐々に対象を共有できてきた時期に爪切りを嫌がるようになったため、爪を切るために手を握っているのは養育者であることが分かり、爪切りを嫌がることは養育者への反発が新たに生じていると考えられた。

また、新生児が手を自分の身体の一部であることが分かる過程において養育者が爪切り時に手を握っていることによって対象として知覚され、身体の一部であることが分かる可能性が示唆される。J. ギブソン(1979)では周囲の環境を隠すことで自分の手を視覚的に特定し、ナイサー(1976)では対象に触れるとき対象とともに手を知覚する「生態学的自己」を提示していた。これらは身体が対象を知覚する個体内の対象化にとどまっていた、本研究においては手が対象になっていく過程に他者が関わっていることを見出している。

(3) 痛みの形成

爪切り後に乳児がつく溜息を痛みの表現とある養育者はとらえていた。この溜息が痛みによるものというのは解釈の域を出ない。乳児はまだ言葉を話せないので、乳児が痛みを感じているのか明確に把握することが出来ない。麻生(2014)は1歳の幼児の観察記録から「イタイ」という言葉を用いる前、「ドン」というオノマトペ表現と痛みとの関係について検討している。本研究においても、爪を切った後に長らく「イタイ」と口にしていた幼児が3歳目前に「キモチワルイ」と違う表現を始めた事例を採集した。現時点では2つの可能性を検討している。一つは、長らく使用していた「イタイ」という言葉で表現していたのは、正確には「キモチワルイ」事態であって、言葉「キモチワルイ」を新たに使用できることで、自分の感覚を表現できるようになった可能性である。二つには、言語表現通り長らく爪切り後は「イタイ」事態であったのだが、「キモチワルイ」事態に移行した可能性である。

(4) 拒否が収束していく心理発達

養育者の世話を必要とする乳児は爪を切られる際には動いてしまう。動く動作は10か月ごろに爪切りを嫌がるようになり、より対応しづらいものになっていく。「(2) 対象関係の複層性」で述べたように、共同注意の実現により養育者への反発と考えている。そして2歳前後であらためて爪切りを拒否するようになる。この後拒否は徐々に収束していく背景として、自他の区分が明確になることが考えられ、具体的に 移動の自由により、養育者との距離を自在に広げたり縮めたりできること、言葉で主張できるようになること、行為の意味を理解できるようになること、信頼関係のなかで交渉できること、以上の3点が考えられた。

(5) 道具を媒介した間接的観察法の開発

家庭内の調査を実施することは、外部の人間にとって容易ではない。本研究で注目した爪切りはお風呂上りや寝る前、幼稚園・保育園に出かける前など養育者と子どもの都合に合わせて不定期で、私的な時間に行われる。事前に訪問時間を設定することができないため、調査実施に踏み出せなかった。そこでインターネットのメールやSNS、それからコロナ禍以降はオンライン会議ツール(Zoom)も利用することで調査が可能になった。さらに方法論の開発として、多くの家庭で導入され、家の中をあちこち移動している掃除ロボットを使用した間接的観察法を考案し、調査を実施した論文を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松本光太郎	4. 巻 21
2. 論文標題 掃除ロボットに同行するフィールド観察研究 動く人工物から探索する人間の周囲に広がる意味	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 51-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松本光太郎
2. 発表標題 意外なことの発生機序ーロボット・外出・ダンゴ虫
3. 学会等名 日本発達心理学会第33回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 松本光太郎
2. 発表標題 親子は未分化から分化へと発達していくのだろうか？：爪を切られる乳幼児と爪を切る親の視点から
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本光太郎
2. 発表標題 乳幼児の爪切りから心の成り立ちの展開を考える
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松本 光太郎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 336
3. 書名 老いと外出	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------